

## 21. 老視に対する遠近両用コンタクトレンズ 処方のコツ

梶田 雅義  
 梶田眼科

### ●はじめに

遠近両用ソフトコンタクトレンズ（以下、遠近 SCL）の処方はずかしのと思われているのは、遠近 SCL がもつ特徴を理解しておらず、装用者のニーズも十分に聴取していないことが原因である。中高齢者では、遠近 SCL のほうが単焦点 SCL よりも処方は容易で、満足度も高い。

### ●適正矯正度数の決定

CL 処方も眼鏡処方もやることは同じである。単焦点 CL でも遠近 CL でも適切な矯正度数を求めることが「はじめの一步」である。眼鏡による適正矯正度数に 1D を超える乱視がある場合には、現時点では遠近 SCL の適応外と考え、1D 以下の乱視がある場合には等価球面值を採用する。

### ●遠近 SCL タイプ分類とその特徴

現在利用できる遠近 SCL のタイプは、次の 4 種類だと考えるとよい（図 1）。しかし、このタイプ分類は筆者が临床上の印象から分類しているもので、他から提供されているものではない。

#### ①二重焦点タイプ

単焦点の遠用度数と単焦点の近用度数がしっかり提供されている。遠方と近方は比較的鮮明に見えるが、調節力が少ない眼では中間距離が不鮮明である。焦点位置か

らずれた距離を明視するために調節が誘発されるため、調節疲労のある場合には適さない。

#### ②二重焦点移行部累進タイプ

単焦点の遠用度数と単焦点の近用度数の間に、累進的に変化する度数が存在する。二重焦点タイプよりも遠方と近方の鮮明さは劣るが、中間距離は二重焦点タイプに勝る。調節疲労症例にも適する。

#### ③累進屈折力タイプ

度数が累進的に連続して変化している。距離によって鮮明さに変化が少ないので、遠方の鮮明さは単焦点 SCL にわずかに劣るものの、近方視は単焦点 SCL に勝る。残念ながら加入度数が大きくないため、少し進行した老視では変則モノビジョンなどの工夫が必要になる。比較的若い世代で近方視作業が多く、調節疲労を訴えるが良好な遠方視力も望む場合に適する。

#### ④累進複合タイプ

遠用累進部と近方累進部があり、その間を累進的につないでいる。遠方も近方も中間距離もそれなりに鮮明に見える。中間距離も見え方がもっとも安定して見えるタイプである。遠用部と近用部の配分によって、矯正度数の効き方が異なる印象がある。調節疲労の軽減に適する。

### ●これまでの矯正状態との整合

これまでどのような矯正を行ってきたかは、遠近

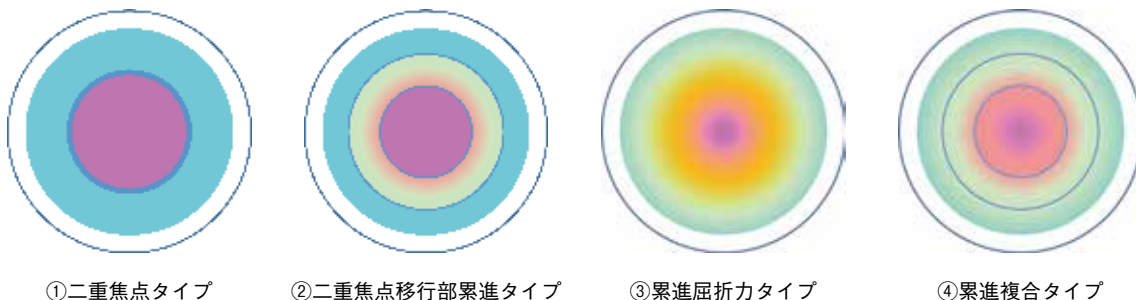


図 1 遠近両用 SCL のタイプ別イメージ

SCL のタイプ選択に重要である。

#### i) 遠用完全矯正

遠くの視力を要求するため、遠方が完全や過矯正になっている場合には、二重焦点タイプあるいは累進屈折力タイプが奏効する。

#### ii) 中間距離に合わせた矯正

近くの見え方を優先して、度数を下げ、遠くはあまり良くないが、PC 作業中などの見え方を優先した低矯正になっている場合には、二重焦点移行部累進タイプや累進複合タイプが奏効する。

#### iii) 遠用完全矯正に老眼鏡の併用

遠方の視力を優先し、完全あるいは過矯正にして、近方作業時には単焦点近用眼鏡を併用している場合には、二重焦点タイプあるいは累進複合タイプが奏効する。

### ●実際の処方例

#### [症例 1]

48 歳の主婦。最近、手元が見づらくなったと訴えて来院した。使用中の SCL 度数は右 S-4.50D、左 S-4.50D であった。眼鏡による適正矯正度数を求めると、

両眼視力 1.2×[右 S-4.25D、左 S-4.50D]

であった。若干過矯正であったことから、i) の矯正状態と考えると累進屈折力タイプの SCL を選択し、適正矯正度数を頂間距離補正した右 S-4.00D、左 S-4.25D を試し装用した。

両眼遠方視力=1.2、両眼近方視力=1.0 (40 cm 視力表)

これまでより遠くの見え方は少し劣るが不満はなく、手元は見やすくなった。以前から続いていた首のこりがなくなった。

#### [症例 2]

43 歳のシステムエンジニア。眼の疲労感を訴えて来

院した。使用中の SCL 度数は右 S-7.00D、左 S-8.50D であった。眼鏡による適正矯正度数を求めると

両眼視力 1.2×[右 S-8.25D、左 S-10.25D]

であった。この度数を CL 度数に頂間距離補正を行うと右-7.50D、左-9.00D である。ii) の矯正状態で、近方作業が多いため、累進複合タイプの SCL を試した。

両眼遠方視力=1.2、両眼近方視力=1.2 (40 cm 視力表)

遠くもすっきり見え、眼の疲れも肩こりもなくなった。

#### [症例 3]

52 歳の女性。遠近 SCL を試したいと来院した。常用眼鏡は使用したことがなく、近方視のために両 S+1.50D の老眼鏡を使用していた。眼鏡による適正矯正度数を求めると

両眼視力 1.2×[右 S+0.50D、左 S+0.75D]

であった。SCL の経験はないが、iii) の矯正状態と考えると、累進複合タイプの SCL を試した。遠方視力を壊さないように、遠近 SCL の度数は右±0.00D、左+0.25D を採用し、加入度数は Mid を装用した。

両眼遠方視力=1.2、両眼近方視力=1.0 (40 cm 視力表)。

遠くは裸眼に少し劣るが、眼の周囲の違和感がなくなり、肩も軽くなった。

### ●おわりに

良好な視力を提供することを目標に遠近 SCL を処方すると、満足できないことが多い。自覚的屈折値を正しく測定して、適正な矯正度数を提供することを目標にすれば、容易に快適な矯正を提供できる。適正な矯正度数の遠近 SCL を装用したときに、どの程度の矯正視力が得られるかは、眼の性能と遠近 SCL の特性で決まる。遠近 SCL の見え方に慣れていただくように指導することで、遠近 SCL 処方成功率は著しく向上する。

## 一人ひとりに、近くから遠くまで、より自然でクリアな視界を。

個々人の年齢や屈折の状態により瞳孔径は異なります。そんな瞳孔径に最適なレンズ光学部を設計したことで、近くも遠くも自然でクリアな見え方を追求しました。新発想デザインで患者の見え方をサポートするワンデーアキュビュー® モイスト® マルチフォーカル。



ワンデーアキュビュー®モイスト®マルチフォーカル

◎コンタクトレンズは高度管理医療機器です。眼科医による検査・処方をお願いします。特に異常を感じなくても定期検査は必ず受けるようにご指導ください。  
◎患者さんがコンタクトレンズを使用する前に、必ず添付文書をよく読み、取扱い方法を守り、正しく使用するようにご指導ください。

ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 ビジョンケア カンパニー 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 販売名:ワンデーアキュビュー モイスト 承認番号:21600BZY00408000 ©登録商標 ©J&J KK 2016